ロバアト・オウエン協会第179回研究集会の論考　2022.June.

「マルク共同体、ミール共同体と資本主義の超越」

石塚秀雄

0. はじめに

本日は報告の機会を与えていただき大変ありがとうございました。

現在ウクライナロシア戦争が行われており、にわかに国際的勢力争いがアジアをも含めて人々の意識にのぼっています。本報告は、ヨーロッパ、ドイツ、ロシアの三題噺の予定ですが、共同体と社会と国家という世界史的な三題噺でもあります。キイワードとしては、産業革命以後の共同体と社会と国家です。英語でいうと、community, society, State です。ただし、community と society との関係は簡単には説明できません。共同体と資本主義社会制度及び社会主義社会制度とどのような関係があるのか。両立するのかしないのか。対立するのか従属するのか。あるいは相互に無関係なのか。共同体と資本主義社会の対立が激化するのは、19 世紀すなわち 1800 年代です。そして共同体と社会主義の対立が 20 世紀に登場します。

共同体と社会の関係については、私が念頭に置いているのは単にヨーロッパの話というだけではなく、われわれアジアにおける問題であるということから、付録として中国について触れています。問題意識としては社会主義中国の共同体問題も重要なテーマであると考えています。共同体を形成することなしに市民社会は自立できない。また中央政府(国家)の権限の縮小しなければ、地域コミュニティの自律性の獲得は困難というのがとりあえずの問題意識です。

1. マルク共同体とミール共同体をなぜ取り上げるのか

ドイツのマルク共同体とロシアのミール共同体をなぜ今更とりあげるのか、と不審に思う方もいらっしゃるかもしれません。いずれも 18 世紀、19 世紀の事柄です。もし、私が「アジア的生産様式論」とか「資本主義生産に先行する諸形態」としての農耕共同体を取り上げると思っているのならば、それは違います。それらに関する議論はすでに 1960 年代にされています。本日の私の話は共同体の歴史的段階論でもなく、農耕共同体消滅論でもなく、共同体は資本主義を乗り越えて未来において存続するのかという設問で、共同体と所有の問題に注目したものです。

マルクス・エンゲルスの農業論の基本はイギリスの農業問題でした。しかしこれはイギリス特有の出来事であり、大陸ヨーロッパでは異なる現象が起きました。イギリスのエンクロージャーは 1700 年代から始まり、大地主が衰退し、農村ブルジョワジーと農村プロレタリ

アートが出現し、農村人口は都市部のプロレタリアートになっていった。都市プロレタリアートはチャーチスト運動を行った。これは一種の文化運動でもありました。これに対して、フランスは伝統的に農業国でありまして、アダム・スミスの代わりにフィジオクラット Physiocrats と言った重農主義者がいました。土地所有者や農民が生産的階級であり、スミスによると、製造業商業は不妊【子供を産まない】不生産階級とフランスでは見なされていました。スミスは製造業や商業が富を生み出すのは労働者の窮乏しかないと言っています。この窮乏は privatation という言葉だとスミスは指摘しています。したがって、農村の変化はイギリスと大陸では違いがあるということです。ドイツはイギリスから遅れる事 50 年、ロシアはさらに 50 年遅れて農村の変動が起きました。ここで確認して置きたいのは、共同体 community は、歴史的に農村社会に存在した。そして都市への移行がはじまり、市民社会 civiil society の形成がすすんだ。った。すなわちブルジョワジーとプロレタリアートの対立が発生し、農村階級を含めた三大階級が出現した。ドイツのマルク共同体とロシアのミール共同体はともに、その後の社会変動における土台となりそれは消滅するのではなくて、変容するものであったというのがここでの仮説です。

2, 19 世紀ヨーロッパ、共同体から個人へ

19 世紀はフランス革命から始まりました。革命政府がル・シャプリエ法により旧来の団体をいち早く禁止し、個人の私的所有を原則としたのは、共同体論においても出発点となる出来事でした。しかしながらそうした資本主義化の方向とちがって、共同体を中心に考えたのがユートピア思想家たちでした。彼らの構想する共同体は農村共同体ではありません。しかし、都市共同体かといえば、そうでもなくいわば、過渡期のミクロコスモス的な小宇宙的な存在で、社会からも国家からも幾分離れた、いわば郊外あるいは田園という場所に位置するものです。いわゆるユートピアンの構想した共同体は、いずれも総合的共同体思想に基づくものといえます。個人の生活スタイルまでも含めたものであることが、協同組合とは違います。協同組合は個人の心情と信条クレドまでは踏み込みません。社会との関連は組合員の自由です。一方、ユートピア共同体はその中に社会も包含したものということで協同組合コミュニティとは異なるものです。この点はコミュニティ論では重要な問題です。労働と消費がコミュニティの範囲内でルール化されるのかそれとも労働以外は個人の自由に任せるのか、その場所はどこになるのか。未来社会が労働時間の短縮と自由時間の拡大という説もありますが、どこの場所で自由時間を使うのかという問題が残っていると思われます。それは市場か非市場か社会かコミュニティか。という疑問です。

さて、ユートピアンの共同体は外部に農地の広がりも想定していて、いわば自給的自足的共同体であり、総合農協モデルといってもよいかと想われます。今日的にはローカルコミュニティといえますが、違いもあります。したがって問いかけは「未来の協同組合的共同体は都市でも農村でも成立するのか」あるいは「それらの共同体は資本主義制度の代案となりうるのか」というものです。従いまして当然ながら、土地所有の問題と私的所有を乗り越える

という問題も付随します。

3.　ユートピア社会主義の共同体の特徴

1820 年代にフランスのサンシモンとフーリエ、イギリスのオウエンは相次いで共同体の構想を発表します。彼らは社会主義者と呼ばれました。島国イギリスは産業革命を早くに達成して、1800 年代にはすでに国内に内戦 civil war というものはありませんでした。いわゆるビクトリア時代(1837-1901)という安定期に入ったのです。これに対して大陸ヨーロッパは不安定期に入ったと言っていいでしょう。1830 年 7 月のフランスのブルジョワ革命、1848 年 2 月のフランスの、3 月ドイツのブルジョワ革命があり、フランス、ドイツ、イタリア、スペインなどで戦争があり、それぞれ国家統一がありました。ヨーロッパの主要国はバラバラではなくて大きく国民国家 nation state あるいは戦争国家 warfare state としてまとまる方向に行きました。ユートピアンの社会像とは逆の方向です。

ん

フーリエ、サン・シモン、オウエンの三人のユートピアンに共通している共同体構想は、人数が 2000 人以内、閉ざされた共同体、調和すなわちハーモニーを原則としていることです。いずれの共同体の建物も左右対称です。そして工業生産も農業生産も内包しています。しかし、三人の違いもあります。一番重大な違いは、フーリエの考えです。フーリエの奇妙とも見える情動論は、「個人は能力に応じて働き、欲求に応じて受け取る」という考えでした。これはプルードンも同様の原則を採用していましたし、またマルクスも「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」という原則を取り入れています。この原則は共同体における個人の位置づけという重大な問題を含んでいるものと思われます。その後のマルクス・レーニン主義においてはプロレタリアート独裁が強調され、個人の問題は軽視されました。芝田進午先生は、『人間性と人格の理論』(1961)という本を書いてこの問題を提起しました。また『協同組合で働くこと』(1987)という本も書いた優れた哲学者であったと思います。

ところで、同じく共同体の運動として注目しなくてはならないのは、トクビルの『アメリカのデモクラシー』があります。これは 1831 年に書かれたものです。ヨーロッパでは共和制がうまくいかないのにアメリカではどうしてうまくいくのかという問題意識を持ち、北アメリカにおけるコミュニティ、共同体運動を見てきます。オウエンの 1825 年のニューハーモニイもインディアナ州にあるラップコミュニティを買い取ったものです。

4.　科学的社会主義と科学技術革命

マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』(1848)では、「批判的ユートピア的社会主義共産主義」という項目でユートピアンを取り上げています。ここではサンシモン、フーリエ、オウエンを本来の社会主義共産主義だとして肯定的に取り上げ、そのほかの封建的社会主義、真正社会主義、プチブル社会主義、ブルジョア社会主義を否定しています。このときのマルクス・エンゲルスによる評価は、ユートピアンたちはまだプロレタリアートが幼年期であっ

たために、依拠すべき階級がいない状態で社会改革を考えなければならなったという、歴史的限界説の立場でした。

またF.エンゲルスの『空想的社会主義から科学的社会主義へ』(1880) が「ユートピアから科学へ」という別タイトルなのは1830年代以降に社会の時間と空間が変形したからです。いわば科学の発展により、社会のあり方がガラッと変わったからです。1830 年代を境にコミュニケーションの形が革命的に変わりました。具体的には、海洋交通、鉄道、電信、郵便、工作機械の科学技術の実用化です。それまでは、ドイツがナポレオンに勝ったという知らせがポツダムにいたゲーテに届くのに14日かかったといいます。松の廊下の刃傷沙汰が地元の赤穂に届くまで約5日かかった。しかし、電信の発明により一日でニュースは届く、鉄道で軍隊は一日で移動できるということになったのです。従って1830年の市民革命と1848年の市民革命とではスピードはいちだんと早く変化しています。戦争もスピードが変わりました。つまりユートピアンたちは科学的社会の前段階であったという意味で科学ではなかったのです。そうすると疑問は「ユーとビア共同体は科学的社会においても有効であるのか」というふうに考えることができます。これは今日的設問でもあります。すなわち、AI,iT技術革命により人々のコミュニケーション方法ががらりと変わったこの sns の時代に地域共同体あるいは共同体はどのように組織することができるのかという問題です。

ところで、当時の共通した時代的制約とはなんであったのでしょうか。19 世紀の時代の大変動は、科学技術革命あるいはコミュニケーション革命、情報革命です。すなわち、1840年代以降の鉄道、電信、郵便などの交通発展です。これは資本主義における都市革命となって都市への人口の集中と統一国家の形成という方向に急速展開し、農村共同体は後進的なものと見なされるようになっていきました。したがって共同体論は時代遅れのユートピアと見なされるようになったのです。しかし、いくつかの理論的な難問は未解決あるいは無視されました。すなわち、「農耕共同体はどうなるのか」「都市共同体はどうなるのか」あるいは「田園共同体はどうなるのか」です。別の角度で見ると「共同所有、私的所有、国家的所有」はどのような関係になるのか」という所有の問題として捉えても良いし、人々の生活のあり方として、個人的領域、共同的領域、国家的領域はどのような関係にあるのか」という問いにもなります。なにしろユートピア思想の共同体はいずれも左右対称でバランスのとれたもので、メンバーも規則的ないわば修道院のような一律の生活が求められて、いわゆる私的生活の余地がみられないものであったからです。そうすると未来の共同体は、どのような形であるのか。コミュニティとはなにか、、国家・公共性と共同体の関係はどうなるのかが問われます。

5. 共同所有ー私的所有ー協同所有

エンゲルスの『空想から科学へ』の種本は、その3年前に書かれた「反デューリング論」で、デューリングがいかにエセ科学かを社会科学、自然科学の科学的立場から批判したものでした。その一部として、むしろデューリングを否定する立場からエンゲルスは、ユートピ

ア社会主義思想家の代表とてサンシモン、フーリエ、オウエンを肯定的に取り上げたのです。そのデューリング論の一部であるユートピアンの部分をまとめたのが『空想から科学へ』だったのです。なぜフランス語で出版されたのかといえば、出版の目的がフランス労働者向けであったからです。すなわち『反デューリング論』はドイツの労働者向けに書いた。『空想から科学へ』はフランスの労働者むけにダイジェスト版として書いた。それではなぜエンゲルスはユートピア社会主義者たちを取り上げたのでしょうか。それはフランスの労働者階級にユートピア思想の影響力があったからです。フランスの労働者階級をマルクス的科学的社会主義の方向に導きたいというのがエンゲルスの目的でした。したがってエンゲルスは科学的社会主義はユートピア社会主義の発展的後継者だと言っています。ただし、歴史的な制約があるとしたのは唯物史観の立場からは当然であります。我々の問題提起は、「科学的社会主義はどのようにユートピア社会主義の発展的後継者なのか」という問いです。この問いのバリエーションは「共同体と国家制度は両立するのか」とか「共同利益と公益とはどのような関係か」、「共有、国有、私有は共存できるか」または「資本主義を廃止または揚棄したその先はどのような形態なのか」などの問いに変えることができます。もしこれらの問いに的確に解答を出すことができるならば、ユートピア社会主義が、ユートピアではなく科学的社会主義というものになり、従来の科学的社会主義は現実を解決できないものとしてユートピア社会主義ということなり、その順序が入れ替わるのではないでしょうか。乱暴な言い方をすれば、科学的社会主義はユートピア社会主義へ向かい、歴史的にユートピアと科学的は逆転してていく。ブルジョア資本主義が主要な形式ではなくなればプロレタリアートもいなくなる。ブルジョワジーとプロレタリアートとはセットであるからです。そこで改めてユートピアンたちが論じた、生産者、産業　私的所有から個的所有・専有の問題が再浮上するのではないでしょうか。

所有の問題は、私有か共同所有の二つに大きく分けられました。その後、俗説では共同所有は、結局のところ、国有または集団所有ということになり、私的所有と共同所有は二項対立するものと見なされたのは、ブルジョア対プロレタリアートの図式があるからです。協同組合所有や個人的所有の議論は深まらないまま、社会主義の実験が行われたことは歴史の示すところです。

マルクスが社会主義革命との関連で協同組合すなわち共同所有について真剣に考えたのは、有名なベラザスリーチとの手紙のやりとり(1879)だったと思われます。このときの論点は、「西ヨーロッパ的資本主義を通過せずにロシアで革命がおきるかどうか」でした。すなわち、ロシアは農村共同体のままで革命が起こせるかという問題でした。このロシアのナロードニキ派の考え、さらに下ってメンシェビキ派の考えに反対して、レーニンは、二段階革命論を展開しました。ロシアの話は後で触れます。所有の問題では資本主義は工業と相性がよいのは、生産手段と労働力の分離的把握が比較的容易だからだと思われます。農業生産労働における所有の難問は、プチブル的所有とくくられて理論的隘路に追い込まれましたが、農業生産労働に自律性をもたせることにドイツは成功した。それは伝統的にマルク共同体

方式における「持分」による共同所有と個人所有の混合が可能であったからだと思われます。すなわち、所有は個人的所有と共同所有がセットでなければならない、ということです。

6. ドイツ、マルク共同体

マルク(Mark)共同体は現代ドイツの社会制度に大きな痕跡を残しているとエンゲルスは言っています。その最たるものが協同組合です。マルクス・エンゲルスは土地所有の起源は原始共産制の血縁的部族所有だと言っています。領主制、封建制などがあり、個人の概念が確立して私的所有や共同所有が明確になったのは近代に入ってのことです。しかし、「所有」という概念においては、近代になって私的所有の概念が登場してから逆算して共同所有とか原始共産制という概念が作られたのではないでしょうか。

マルク共同体の特徴は、山林や牧草地などは共同体所有であり、農耕地は構成員に割り当てあれた持分(Hufe)としての共同所有、プラス住宅その他の個人所有の三つの所有の組み合わせであったことです。この「持分」は2006年改正のドイツ協同組合法の中でも重要な概念です。伝統的な共同所有は、日本でいう「入会権」に類似したものです。つまり領主所有である土地の枯れ木は農奴や農民が自由に採取してよかった。土地は所有していないが利用権があった。すなわち「占有権」があった。しかし、資本主義的な土地の私的所有が全面にでてくる19世紀に入ると、1808年から1811年にかけての一連のプロイセン農業立法の制定により、農民は領主への人格的従属関係は形式上廃止されました。これはナポレオン戦争のために、必要な措置でもあったわけです。領主の土地、教会の土地は、私的所有になった。もともと大多数の農民は領地に付属する農奴であったから、私的所有の観念は持ちません。プロシャでは1850年に地役権(土地使用権)の自由化を行いました。エンゲルスはマルク共同体が解体されて、ドイツの農民はロシアのミール農民よりも不自由になったと述べています。

マルクスが1842年の24歳の時に書いたのが、ライン州議会むけに書いた論文「木材窃盗取締法にかんする討論」です。これは映画「若きマルクス【邦題、マルクス・エンゲルス】」の冒頭の場面に出てきますが、枯れ枝を拾っている農民達に所有者の騎馬隊が襲って虐殺するという情景です。しかし、マルクスの論理は、入会権を主張するのではなく、落ちている枯れ木は、生きている木に所属するものなのかどうか、というスコラ的論点でした。これは「木材窃盗法」という法律に対抗する論理としては致し方ないことでしたが、マルクスが所有、また土地所有について論じたのは1846年の「哲学の貧困」でのプルードン批判においてでした。プルードンは「所有とは盗み」であるというフレーズでマルクスを引きつけたのですが、マルクスはプルードンの非科学的側面をトートロジーだと批判しました。しかし、プルードンは経済学の本を書いたのではなく、貧困を克服するコミュニティとはどういうものなのかを書いたので、マルクスの批判はプルードンの意図とはすれ違う科学的批判となってしまいましたが、一般にマルクス主義者におけるプルードン評価は下がってしまいました。マルクスはプルードンの所有とはとどのつまり土地所有つまり地代のことにすぎ

ない」と言いました。地代は借地農が農民の多数派になった初期資本主義以来のものである。したがってマルクスがいわゆる協同組合的な共同所有の理論に明確に気がつくのは、もっとずっと後で、ロシア語の勉強は始めた 1854 年以降さらには古代研究などを始めた 1865 年以降ではないかと私は推察しております。しかしながら、マルクス・エンゲルスは、1845 年の『ドイツイデオロギー』で、カール・グリューンという学者を批判する形で、フランスのサンシモン主義、フーリエ主義、プやルードンについて擁護する立場で触れています。当時はユートピア主義者とは呼んでいませんでしたが。ここでは所有や階級についてサンシモンやフーリエの考えを曲解しているグリューンらの真正社会主義の連中をマルクス・エンゲルスは批判しています。しかし、『ドイツイデオロギー』がドイツ語で出版されたのは 1932 年で、それまで知られてはおりませんでした。

7. ビスマルクモデルと農業協同組合

ビスマルクモデルの成功は、資本主義的産業(工業)と資本主義体制の中での農業をいかに両立させるかという難問をビスマルクはうまく解決したことにあると思われます。それは福祉国家論 welfare state で言われるところのビスマルクモデルという社会政策あるいは社会保障制度を作り上げたことです。地主貴族ユンカーの出身であったビスマルクはユンカー地主階級の利益を守りつつ、遅れた産業革命に取り組むという課題を、工業と農業の二重制度あるいはダブルスタンダードとすることにより切り抜けました。いわゆる社会保険制度とは、いわば共同体の共助を社会の中に取り込むということとで、とりわけ農村において取り込むことに成功しました。イギリスは農村をエンクロージャーで破壊した。ドイツは協同組合で維持したといえます。いわゆる総合的地域協同組合というものを農村地域に設立しました。ライフチァイゼン型協同組合は農村を中心に、シュルツェデリッチュ型は都市部にという形です。これによりドイツは資本主義化(産業化、工業化)を進めることができました。1870 年のフランスプロシャ戦争によりドイツは勝ち、統一化を実現します。フランスでは 1871 年にパリコンミューンが発生します。

ドイツでは社会政策学会が 1873 年に設立されました。日本では早くも 1896 年にドイツにならって設立されました。そしてこの社会政策学会はドイツと日本にしかありません。あたかもオウエン協会がイギリスと日本にできて、現在日本にしかないのと似ています。ドイツの社会政策学会は講壇社会主義とか新歴史学派とかいわれ、プロレタリア革命より社会改良を目指すものとみなされています。なお、テンニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』という本は、共同体、社会、国家、所有というテーマを考える上ではほとんど参考になりません。

過去、日本でも社会政策学会のメンバーで協同組合に関心をもった人が何人もおります。社会政策とは総資本と総労働の調整だと、大河内和男が定義しています。マルクス主義が総資本と総労働の対決だということに対応したものです。

マルクスの「ゴータ綱領批判」の中で、ビスマルクの友人でもあったラッサールを指導者

とするラッサール派による労働者協同組合を国家扶助を受けて推進するというプログラムに対して、マルクスは、国家支援などを受けるのは本当の労働者協同組合ではないと批判しました。この点については別のテーマなので本日は触れません。ビスマルクモデルから我々が引き出す教訓は、「農業は資本主義化しないで、小農すなわち分割地農民主体の農村地域共同体の自主性にまかせたほうがよい」ということです。これはロシア・ソ連における設問としては「農業は国営化しないのがよい」ということになりますが、これは後で触れます。

8. 資本主義と農業の相性の悪さ

資本主義と農業は相性が悪い、というのが私の考えです。植物・家畜は生き物ですから、効率第一というわけにはいきません。ドイツの農民の平均耕地面積は日本より大きいですが、協同組合を中心にすることにより、いわゆるプチブル農民が担い手となることにより安定化します。いわゆる協同組合における共同所有と個人所有の概念的区分は「持分」Geschäftsanteil という概念で説明することができたというのがドイツ的考え方といえます。この協同組合の「持分」という概念は、一般には聞き慣れない言葉なので、多少の説明を追加いたします。Geschäft は普通の意味は、会社、商店です。Anteil は「分け前、出資分、持ち株、関与、参加、部分」などの意味があります。そしてドイツ語の辞書には Geschäftsanteilk の意味として「(有限会社社員などの)持分、営業持分、社員権」などとあります。協同組合は組合員に最低限の出資(持分の払い込み、持分参加)を義務づけています。英語では協同組合の「持分」を share と言っています。協同組合の「持分」は参加(出資)(Beteiligung, 英語 Participation)における割合的権利(英語 share)を示します。そしてその平等性は「１人１票」原則という人的民主的決定原則として示されます。協同組合における苦組合員(個人)間の共同性と平等性を保障するのが「持分」という概念であり、協同組合における所有の問題にとって重要な概念といえます。

現在ドイツ協同組合運動はグローバルな運動と連動して社会的経済という規定を受け入れつつあります。それまではドイツは自らの社会的市場的経済 sozialmarktwirtschäft という方式を重視してきました。これは一種のコルポらティズムで、国家と資本家団体と労働組合との均衡に基づいた混合経済ということができます。たしかにドイツは独自に、共同決定法や男女平等法などによりいわば独自の労働者の権利を追求してきましたが、経済問題と社会問題は明確に区別して役割分担をしていました。しかし、福祉国家が新自由主義によりゆらぐなかで、経済と社会の問題は密接な関係を必要とするようになり、協同組合運動も新しい協同組合運動 Neue Genossenschaft としてを承認するようになったのです。

ドイツ協同組合運動の歴史は、マルク共同体をベースにして持分 Geschäftsanteil という概念で共同所有と個人所有の矛盾を克服するいわばメビウスの輪のようなもので、共同所有が国有や公有一辺倒に考えられていたことの解決策であり、また資本と労働の対立という図式の中で、プチブル(小農)の存在意義が保証されるということになると思われます。結局、ビスマルクモデルの成功は、協同組合方式を社会制度の中に取り入れ、都市と農村の

制度的棲み分けをしたことと、国家が共済組合方式を援用することで社会保険的福祉国家の原型モデルを作り出したことにあると思われます。

9. ロシア、 ミール共同体

次にロシアのミール農村共同体ですが、ミールというロシア単語の第1の意味は世界world という意味です。一定の自治権を持ち、共同耕作地を分有するものでしたが、1600 年代に入って皇帝ボリス・ゴドノフによって農奴制度が導入され,1723 年にピヨトール大帝が農奴制を貴族のために合法化したことにより、ミール共同体は変形していきました。ロシアはドイツよりも社会経済制度の発展がさらに数十年遅れており、アレクサンドル二世はマルクスに言わせると、ロシア革命の偉大なるイニシエーターということになりますが、その農奴解放令(ｏｓｂｏｂｏｊｄｅｎｉｅ ｋｒｅｓｔｙａｎ)が出されたのが 1861 年です。これは直訳すれば「農民解放」です。農民(クリスティア)というロシア語の語源はキリスト教徒という意味です。マルクスは、2500 万人の農民、1300 万人の農奴、11 万人の農奴地主といい、農奴 1000 人以上所有している貴族は 4000 人と言っています。農民は税金や地代にさらに縛られることになりました。

ロシアは 1856 年のクリミア戦争の敗北(現在のウクライナ戦争に似ていますが)により、西ヨーロッパの近代化に敗北したことを受けて、農奴制という資本主義にとっては遅れたシステムを廃止しました。土地所有形態が封建領主や教会の所有から自由化する動きは、西ヨーロッパでは 1800 年に入ってから活発化しています。ここで初めてブルジョワジーおよびプチブルジョワジーの土地所有すなわち、土地の私的所有すなわち、個人間で土地を売買できるという観念が主流になります。実際は農民は新たに「地代」rente という金利すなわち地代、小作料、そして借地料、借金に縛られということに移行しました。すなわち、農民は相変わらず、資本主義化する地主に従属しなければならなかったのです。ロシアではナロードニキ派が登場します。ナロードという言葉の意味は広く、人民、国民、民族、世間と言った意味を含みます。ナーチアというのはネーションと同じで国民、民族、国家という意味を持ちます。ちなみにプーチンがロシアとウクライナは同じナロードだと言ったのは、多分、兄弟あるいは運命共同体というような意味であったと思われます。ロシアの農村の変化は土地所有の近代化の中で相変わらず農奴制であった。この時期、農民一揆、農民戦争がロシア全土で増加しもます。1850 年代からのナロードニキ派は、ロシアの農村の変化すなわちロシアの変革を目指した。これを受け継いだ社会主義革命のメンシェビキ派はロシアの革命は、ロシアが資本主義化すなわち西洋諸国のたどった道を踏襲しなくても、革命はできるのだと考えた。すなわち、スラブ主義と言われました。

10. レーニンの協同組合と共同体

一方、レーニンたちのボルシェビキ派は、資本主義を通過しなければ革命は起きない。資本主義を通過するということはブルジョワジーがヘゲモニーを一度は握るということです。

だから革命はまず民主主義革命つぎに社会主義革命が起きる。すなわち、西ヨーロッパと連動するという永続革命論でした。いずれにおいてもプロレタリアートが主導的な役割を果たす。そしてプチブルジョワジーは、民主主義革命まで積極的な役割を果たせるが、結局は消滅する階級だ。なぜならば社会主義的所有は生産手段の私的所有を廃止するからだという信念を持っていました。
ロシアのミール共同体のドイツまマルク共同体と違う点は「持分」という農民同士の共有関係はないことです。農民は封建領主、下って地主やクラークといった富農が所有している土地の使用権、村落における共有権だけをもっている永代土地利用の小作あるいは借地農でした。その後土地の市場化が西ヨーロッパと同じようにおきましたが、結果的には借金農民が増大しました。1905 年には第一次ロシア革命がおき、ストルイピンの農地改革が実施されました。結果は農村ブルジョワジーの増大、ミール共同体の解体でした。レーニンは 3 万人の地主と 1000 万人の貧農と言っています。レーニンの農業問題のアプローチで「ロシアにおける資本主義の発達」「社民党の二つの戦術について」などの論文で一貫しているのは、農村も資本主義化しており、農村資本家と農村プロレタリアートと対決であり、小農(プチブル農民、自作農)は、当面プロレタリアート側につき、そして結局はそれに吸収されてしまうのだということを、統計数字を駆使して証明したとしています。

一方、マルクスはロシアの革命をどのように考えていたのか。有名なベラ・ザスリーチとの手紙のやりとりがあります。ベラはメンシェビキ派であったので、ロシアの農村共同体の独自論の側にいました。その前にマルクスは共同体論としてはどんなことを考えていたのでしょうか。1846 年の「ドイツシデオロギー」では、所有の最初の形態は部族的所有すなわち共同体所有だといっています。しかし、これは単に私的所有と対比したにすぎません。1853 年の「資本主義的生産に先行する諸形態」で、共同体所有に触れていますが、これも先行する形態という段階論の枠内で考えていました。すなわち発展すれば資本主義にたどり着くそして通過するものだと考えていました。言い換えるとこれは西ヨーロッパ中心主義で、そのほかの国は遅れた後進国であるという考えです。私は、マルクスとエンゲルスが共同体のことを真剣に考え始めたのはかなり遅い、すなわち 1880 年代前後だと考えています。エンゲルスの『空想より科学へ』が 1880 年、『家族、私有財産、国家の起源』と『未来のアソシエーション社会について』が 1884 年です。マルクスのベラ・ザスリーチへの手紙は 1881 年です。ベラ・ザスリーチの質問は、第 1 に、農村共同体は都市プロレタリアートのイニシャチブに従うべきものか、第二に、すべての国の革命は西ヨーロッパ型の資本主義を経験した後でなければならないのか、でした。

これに対して、マルクスは、西ヨーロッパはゲルマン共同体でロシア共同体とは違う。資本論はロシアの資本主義を論じていない。共同体は革命により新たな形で再生すると言うようなことだと私は理解しています。すなわちマルクスの考えはメンシェビキ派に近かった。しかるにレーニンとトロッキーたちのボルシェビキ派による革命が起きた。農業あるいは農民をどう分類していたかは先ほど述べたとおりです。さらに、都市プロレタリアートの

共同所有はどうなったかといえば、労働者協同組合は不採用となったのです。

レーニンが実施したのは、1875 年のゴータ綱領批判でマルクスが主張した、自主的な労働者協同組合でもなく、マルクスが批判したラッサール派の主張する国家扶助による労働者協同組合でもなく、国営工場でした。工業はいわゆる計画経済でなんとか成立したが、農業は自然が相手ですから、計画経済ではうまくいきませんでした。農業プロレタリアートによる国営農場のソホーズや集団農場のコルホーズは失敗しました 1923 年の NEP(新経済政策)でボルシェビキ政府は、農作物の生産ために農業におけるアルテリ(協同農場)や小農の存在容認せざるを得ないことになりました。

11. 結び

今、資本主義の危機や限界が議論となっています。斉藤幸平さんをもじっていうならば、マルクスは自然の物質代謝を含めた共同社会の実現を予想していたということが出来るでしょう。資本主義の否定あるいは代案は、private capital から social capital または associative capital and labor になるでしょう。すなわち協同組合企業を基本モデルとした社会経済連帯主義が、古い共同体論をリニューアルして、歴史の一周遅れのチャンピオンになるのではないでしょうか。マルクスはリバイバルと言っていますが。

世界史的に見ると先進国で社会主義革命は起きておりません。レーニンはロシア革命の実現を、独自のレトリックで、ブルジョア革命 k の連続としてのプロレタリアート革命の二段階論として、プチブル農民については最初は労農同盟として容認し、最後は消滅するものと考えました。レーニンの 1917 年に書いた『国家と革命』はおよそ農民の問題はでてきません。したがって逆説的ではありますが、ロシア革命は第 1 段階の民主主義革命であり、プチブルジョワジー階級までを消滅させる社会主義革命はできなかった。そのうち 1991 年にソ連は崩壊してしまい、そのときはプロレタリアート独裁の変形である全体主義国家というものであったということができます。レーニンの躓きの石は、農業問題であり、農村共同体の問題であり、結局、農民と労働者のそれぞれの個体的所有と共同所有をどのように実現するのか、どのようにあるべきかということを考え抜くことはなく、国有による全労働者の所有というレトリックでごまかすことになり、崩壊したのです。そしてロシアもそして中国も現在ようやく資本主義の発展過程を通過しているのだと思われます。資本主義でも社会主義でもその躓きの石は、農業であり農村共同体です。共同体と社会と国家の関係は、誤解を受けるかもしれませんが、共益、私益、公益の関係にあると思われます。資本主義が私益の塊で社会主義が公益の塊という図式で相互に排除するものとして設定することは正しくなかったというのが歴史の示すところです。未来社会においては共益、私益、公益は個人の人間関係の発出の仕方の違う形式概念として相互関係にあるものとして捉えるべきではないでしょうか。

最後に結論的な問題提起としてあげられる質問は、第一に、未来において、「共同体はどのような形式が可能か」です。インターネット時代におけるコミュニティとはどのような形式

が考えられるか、すなわち、ローカルコミュニティだけでなく、グローカル【ローカルでありグローバルな】コミュニティ、あるいは地域を越えた少数派コミュニティなども発生するのではないか。ということです。第二に、「共同体という経済方式が農村でも都市でも成立可能なのか。都市部においてはとりわけ労働者協同組合という形式が優位性と有効性が確保できるのか。すなわち、コミュニティの経済的形式として、society, company, association, cooperative, enterprise, initiative, foundation, mutual と諸形式のどれが採用できるのかという問題です。第三に、未来における「国家」とはどのような機能を持つものなのか。国家が消滅するという説と共同体はどのような関係にあるのか。国家論にはいろいろな切り口があるでしょうが、私は「国家とは戦争をするためのものである」と定義したい。現在言われる nation state〈国民国家〉は、領土、国民、主権、軍備、外交、租税徴収、公共。国家は領域を持つ。アダム・スミスは、財産権が発生して市民政府が必要になったと述べています。カントは「永遠平和のために」の中で、平和のためには常備軍をなくすことと、国連を作ることと言っています。すなわち、戸別国家としての軍備、外交は不要ということになれば、いわゆるネーションステーツの必要はなくなります。国家の機能はコモンズという公共性の領域だけになるかもしれません。

昔 G.フーケなどの「協同組合共和国」論がありましたが、未来は「社会的経済。連帯経済セクター」が国家の主要な経済形式になるのでしょうか。これまで見たように資本主義と国家は必ずしも折り合いのよいものではありません。市場万能論、市場の自動調整機能は、理論的には国家を媒介しないものですが、新自由主義に見られるように国家との共犯関係にあります。これは旧来の社会主義国家やファシズム国家やコルポラシオン国家も、資本家と国家との同じ共犯関係にあります

一方、社会的経済セクターが国家の主要な経済機能を担うことになれば、国家は人民主権が矛盾なく実行可能となります。社会的経済企業は、労働者協同組合の原則をベースにしていますが、広く社会的有用性すなわち社会的目的、社会的責任、ディセントワークを原則としたものです。

一般論として問題の整理をすれば、

(1) 協同組合または共同体コミュニティと社会と国家との関係はどのようなものになるべきか。社会的経済連帯主義国家というものは可能か、と問いをことができます。これはカール・ポランニーの三つの経済形式、交換、再配分、互酬を民主主義的に組み込むことでもあります。また所有の問題では、憲法に私有権の絶対的保障を条文化することはやめ、公的所有、共同所有についても条文化することです。

(2) 具体的には、国家は、憲法に社会国家を明記する【イタリアなど】あるいは連邦制、自治州の合州国【米国、スペインなど】になるあるいは社会的連帯経済主義国家をめざす。

(3).中央政府(国家)の権限の縮小により地域コミュニティの自律性の獲得は可能か。

(4)地域コミュニティまたは地域共同体は、未来社会の中核となるには、国家または中央政府の役割を縮小化(地方自治の主体性の拡大)を伴うことにより可能か。

(5) 公有・共有・私有の組み合わせは可能か。どれか一つになるのか。すなわち社会的経済・連帯経済セクター(協同組合、アソシエーション、共済組織などの社会的企業が不可欠)が地域コミュニティの基盤になければ不可能ではないか。
(6)都市に労働者協同組合とその他社会的経済企業、農村に農業協同組合がそれぞれ中核となれるのか。
(7) 協同組合または社会的企業はグローバル化に対応できるのか。グループ市場において非営利・協同セクター(社会的経済セクター)の市場(金融市場を含む)を形成することにより可能。【個人の欲望、競争心などを否定してはならない。公益性と私益制はセットであり、片方だけを考えてはならない。

いま新自由主義がゆらぎ、資本主義の限界も言われるようになっていますが、その代案とし成立可能なのかという点において共同体論を一層深めていくことが肝要かと考えます。
結論は質問を投げかけるだけになりましたが、以上で私の話は終わりです。ご静聴ありがとうございました。

●●●